

8 文型システムによる基本文型と派生文型の統合的分析

河 宮 信 郎

Abstract

英語文型に関しては、Onions 以来の伝統的な 5 文型論がなごらく標準であった。しかし、副詞を文型要素から一律に排除することは不合理であり、5 文型では原理的にカバーできない構文が多数あった。R. Quirk らはこの点を是正し、「7 文型論」を提起した。これにより、英語構文をひろくカバーできるようになった（網羅性の向上）。これをさらに改良したものが安藤貞雄の「8 文型論」である。なお、「8 文型」の枠に収まらない「派生文型」が 4 種ある。構文に対する網羅性を高めるために、文型数を増やすと簡明さや一覧可能性が損なわれる。高い網羅性と簡明さを兼ね備えた文型システムが望まれる。本考察は、8 文型論の再検討と拡張によってこの課題に答えることを試みる。自動詞の文型は SV; SV+A or C; SVC+A or z のいずれかである。これを包括的に SVXY と表す（空白の項を含む）。他動詞の文型は SVOX で、X は空白 (Null)、O、A、or C のいずれかである。本考察によれば、自動詞文型 SVXY、他動詞文型 SVOX に対して、文型要素の個数と品詞的機能から X、Y を容易に決めうる。この方法によれば、「派生文型」を含めた一般の構文に対して、的確な文型分析を簡明かつ迅速に行うことができる。

‡ 略語リスト

S=subject: 主語、V=Verb: 動詞、Vi=intransitive Verb、Vt=transitive Verb、PV=Phrasal Verb: 動詞句、∅=Null: 空白、A=Adverbial: 副詞（句）、C=Complement: 補語、sC=subject Complement: 主格補語、oC=object Complement: 目的格補語、O=Object: 目的語、iO=indirect O、dO=direct O、PP=prepositional phrase: 前置詞句、z=付加語。

§1 はじめに

「Diamond is hard.」の文型は SVC である。では「Sanskrit is hard to learn.」の文型はなにか。じつは、この型の構文に対応する「文型」は設定されていない。

この種の構文は、hard/easy・fit/unfit・possible/impossible・dangerous・tough など、ある種の状況評価を表す形容詞（述語用法）に、不定詞（副詞用法）が続く場合に生じる。たとえば「The English alphabet is easy to learn.」なども同じ構文になる。そこでこれを「hard/easy 構文」と呼ぶ（変形生成文法ではこの種の形容詞を tough で代表させる）。

この構文、たとえば Sanskrit/ is/ hard/ to learn. の文型要素は 4 個で、順に S/ V/ C/ A と考えてよい。すなわち、文型は SVCA となる。hard/easy 構文を SVCA (A: Adverbial) という文型

に帰する (assign) こと自体にはさして異論が出ないであろう。

ところが、この SVCA 文型を単純に従来の「基本文型」に付加することはできない。というのは、「基本文型としての SVCA」がすでに存在するからである。それは下記のような文である。

Mary is afraid of dogs. [fond/afraid 構文]

この構文を固有の文型と認知したのは安藤貞雄である [安藤 p. 18]。彼によれば、この文型は be 動詞などの copula の補語に「2 項形容詞」が入る場合に生じる。2 項形容詞とは、fond of/ afraid of/ aware of/ surprised at/ interested in/ insistent on/ subject to/ 等、叙述の対象を表す項を要するものである。この「fond/afraid 構文」に即して、SVCA が設定された。

しかし、これらの表現はしばしば動詞 1 語で代替しうる。たとえば、be fond/afraid of → like/ fear など。むしろ、このほうがより自然な表現となる場合が少なくない [Hornby p. 197]。

したがって、SVCA 構文がこの種の形容詞に限られるのであれば、「be+形容詞」を動詞句 PV と見て (VC→PV)、S・PV・A の文型Ⅲを充てればよい。こうすれば、とくに新文型を設定しなくてもすむ。

このように、be fond (VC) + of (PP) と分節する場合に、SVCA を SViA (自動詞+副詞句 PP) と再解釈できる。to 不定詞や that 節への接続を考えると、前置詞の前で切る SViA への読み替えを取るほうがよい。べつに、be fond of などと一体とみて、SVCA を SVto (他動詞+目的語) と読み替えることもできる (しかし、この phrasal Vt は一般に受動態をつくらない)。

ところが、つぎのような文例では、「be+形容詞」を動詞句とみるわけには行かない。

Mary is kind to say so. [kind/wrong 構文]

これも SVCA である。つまり、kind/unkind, right/wrong, certain/uncertain, eager/reluctant など (これらは 2 項形容詞とはいえないが)、不定詞句等を従える場合には、この文型をとる。この構文は SVCA によらないかぎり分析できない。この種の「be+形容詞」を動詞句 VP とみなすのは無理である。fond/afraid 構文と異なり、イディオム的に固定された用法ではないからである。

この kind/wrong 構文も、fond/afraid 構文と同じく、好悪など主観的な感情を表しており、hard/easy 構文を取る形容詞とは異なっている。e.g. Jim is wrong to beat the kitten. など。

この SVCA 構文の副詞句 A が不定詞句になる場合、前置詞が省略される。たとえば、

Mary is afraid to lose it.

that 節が続くときにも同様に前置詞が省略される。この省略はあくまで省略であって、「1 項形容詞」になったのではないことに注意すべきである (後述)。この場合、前置詞句 PP と置き換わる to 不定詞や that 節は基本的に副詞として機能する (that 節が副詞的であることに注意)。

ここで、fond/afraid 構文 : (a) Mary is eager to please (others). と hard/easy 構文 : (b) Mary is easy to please. を比べてみよう。

両者の相違点は、不定詞句 (補文) の意味上の主語・目的語に関わる。すなわち、(a) では文の主語 Mary が不定詞の意味上の主語である。しかし、(b) では文の主語 Mary は不定詞の目的語である。これが hard/easy 構文の特徴であり、この型の SVCA を SVCA 2、通常の fond/afraid 構文や

kind/wrong 構文などの SVCA を SVCA 1 と名づける。

Hard/easy 構文は、普通の SVC 文型である b2)、b3)と同義である。

(b1) Sanskrit is hard to learn.

(b2) It is hard to learn Sanskrit.

(b3) To learn Sanskrit is hard. 単純 SVC (深層)

生成文法では (b3)→(b2)→(b1) の変形が生じたと考える。基層の (b3) から (b1) に行くには、つぎの変換を施す

A: 形式主語 It を用いて不定詞句 to learn Sanskrit を文末に回す (extraposition)。

B: 不定詞の目的語 Sanskrit を文頭に上げ、It に代置する (tough movement)。

構文 (b3)、(b2) が問題なく基本文型であるのに対して、hard/easy 構文 (b1) は (b3) から A・B の変形を経て導出されたものである。

生成文法ではこの構文を取る形容詞を “tough” で代表させ、この変形を “tough movement” と呼ぶ。生成文法の視点からいうと、(b3) が基本文型 (深層構造) であり、(b1) はそこから派生した文型ということになる。じつは生成文法では、不定詞句を主語とする (b3) のさらなる深層として [Someone learn Sanskrit] is easy. のような補文主語を想定する [松井 p. 27]。しかし、この層まで降りると、非専門家にはかえってわかりにくい。(b3) から出発することで十分であろう。

この種の SVCA (b1) の成因としてはつぎの解釈も可能である。(b3) の {To learn} Sanskrit is hard. において、主題である Sanskrit を文頭に残して to learn を後置し、{It} is hard to learn {Sanskrit.} の構文に合わせたと考えるのである。この意味では、(b1) は一種の「混交文」、つまり 2 文を合成・簡約した表現ともいえる。

要するに、このような変形 (通時的変遷でもある) を捨象し、hard/easy 構文に SVCA 2 という文型を設定して、fond/afraid 構文 SVCA 1 と共時的に併存する文型と見るのである。

§2 文型論の総括

前節では SVCA の構文の諸形態を検討した。ここでは、従来の英語文型論を概括することによって、SVCA の文型がどのように導入され、他の文型とどのような関係にあるかを考察する。

まず、伝統文法の 5 文型論 (5 SPs)、R. Quirk らによって導入された 7 文型論 (7 SPs)、そして安藤貞雄による 8 文型論 (8 SPs) の関係を表で示す。

なお、8 文型論の主旨はこうである。Jim is fond of apples. とか Mary is afraid of dogs. のような構文は初級の text に出てくる。しかし、これは従来単なる SVC あるいは複合動詞的 idiom とみなされ、独自の文型とは規定されていなかった。安藤貞雄はこの構文を SVCA 文型と認知した [安藤 p. 18]。この文型を新設することで、基本 8 文型が得られた。8 文型論は現在最も統合的な文型システムであり、これが英語教育の場でもすみやかに定着することが望ましい。

文型表の対照

8 SPs	7 SPs	5 SPs	文型	文例
I	○	1 st	SV	Money talks.
II	○	×	SVA	She is out.
III	○	2 nd	SVC	Diamond is hard.
IV	×	×	SVCA	She is afraid of dogs.
V	○	3 rd	SVO	Bees gather honey.
VI	○	×	SVOA	Jane put her bag on the stool.
VII	○	4 th	SVOO	Mary showed John a map.
VIII	○	5 th	SVOC	I saw a dog cross the road.

(この文型の順番は、SV のつぎに SVA、SVO のつぎに SVOA を続けた。すなわち、自動詞文型 S VX、他動詞文型 SVOX の最初に A を置く。5 文型からの拡張は通常この順で行われる。)

伝統文法の 5 文型論は副詞を文型要素と認めない。つまり、文意上必須の語であっても、それが副詞である場合には、無視して文型分析を行う習慣になっていた。この欠陥を是正したのが R. Quirk, S. Greenbaum らの 7 文型論であった (1985 年)。文意上必須の副詞を正当な文型要素と認めることで、基本文型でカバーしえない構文が大幅に減った [Quirk et al.]。

この 7 文型論は広範な英文 Corpus の分析による記述文法的な立場からの提起であった。しかし、構造文法や生成文法の構文分析ともよく整合している。この 7 文型に至って、構文に対する網羅性 (coverage) は格段に改善された。

この 7 文型に SVCA 1 の文型を加えると 8 文型になる。これを提案したのは安藤貞雄である [安藤 p. 18]。彼は 7 文型で漏れていた fond/afraid 構文に対して SVCA という文型を設定した。これは明察であり、7 文型に対する重要な改良である。これによって「copula+形容詞+PP; 不定詞句; that 節」構文に固有の文型が与えられた。

ここで 8 文型論の consistency に関わる問題を検討する。

1) C と A の区別について

旧 5 文型において C は名詞句、形容詞句、準動詞句のどれでも可である。しかし、副詞だけは不可であるとされてきた。しかし、副詞排除には論理的な整合性がない [副島隆彦 p. 227]。

副詞句も C に入れるものとする、SVC が SVA を、SVOC が SVOA を包摂することになる。構造文法の文型システムはこの視点をとる [松井 p. 105]。C と A をまとめて義務的な付加語 Adjunct 一般を X で表すと、II と III の文型が SVX、VI と VIII の文型が SVOX にまとめられる。この立場に立つと、8 文型が「6 文型」に縮約される。文型数を減らす点でも、この分類法も考慮に値する。

ただし A を C に含めると、SVCA (IV 文型) の設定に難が生じる。これが SVCC' に書き換えられるため、「C は形容詞、C' は副詞句」という但し書きをつける必要が生じる。この点で、A を特定せず、C に含める文型表示は粗すぎる。

しかし、じつは「SVCA」という表示も粗い。なぜなら、この文型の C は、補語一般ではなく、特定の形容詞に限られる。すなわち、本稿でいう fond/afraid 型、kind/wrong 型、hard/easy 型の形容詞である。SVCA は、これらの形容詞に対して特異的に生じる構文である。

2) SVCA 構文の諸形態

8 文型論は、fond/afraid 構文 (SVCA 1) に即して SVCA という「基本文型」を設定する。そして、hard/easy 構文 (SVCA 2) は「tough 変換」で導出される「派生文型」であるとする。

しかし、fond/afraid 構文自体は、「be+形容詞」の部分をも動詞句 PV とみることができる [Hornby p. 197]。そうすると、この構文の文型を S・PV・O や S・PV・A と解することができる。ここで、「文型 assignment が 2 通り可能な場合には、なるべく単純な文型を採る」という補助規則 (Sub-rule) を立てる。この規則に照らすと、fond/afraid 構文や受動態を SVCA ではなく、S・PV・A の文型 (または S・PV・O) に帰着させるほうがよい。なお、be afraid of/ be interested in などの用例からわかるように、この構文は受動態の構文を表しうる。しかし、一般の受動態 (動詞句) を改めて、基本文型 SVCA に配属しなおす必要はない。ところで、この「be+形容詞」を動詞句 PV とみなすことで SVCA の基本文型が不要になるかということ、そうではない。SVCA でしか分析できない構文がある。すなわち、kind/wrong 構文および hard/easy 構文である。8 文型論では、このうち、kind/wrong 構文が基本文型、hard/easy 構文が派生文型に assign される。

本稿では実用的な視点から、hard/easy 構文を SVCA 1 に準じた「準基本構文」SVCA 2 とすることを提唱する。これにかぎらず、8 文型論で基本文型の枠外に置かれた「派生文型」も、S, V, A, C, O などの要素分析を適用し、基本文型に準じた扱いを試みる。これは、8 文型論に対する異論ではなく、むしろ補強である。この視点に立つと、派生文型もその出自 (通時的な成立過程) を問わず、基本文型と共時的に並存する文型 template として理解することが可能になる。

たとえば、SVCA 2: Sanskrit is hard to learn. を準基本形として、設定することにより、直接にこの構文を理解することが可能になる。個々の文に対して §1 の (b3) → (b2) → (b1) のような変形 (tough 変換) に立ち返ることなく、固有の構文 template として理解し、活用しようというのである。他の派生文型に対しても同様の template を考えて構文解析に利用することをめざす。

§3 派生文型と基本文型の関係

基本文型 8 文型に収まらない「派生文型」が安定的な構文として存在する。安藤は、これをつぎのように整理している [安藤 p. 51ff.]。

1) There 構文: There is no one waiting.

これは There is no one. と No one is waiting. の結合で生じる。この構文は一般に There+be (copula) + Subject. と Subject + be・predicate の結合で生じる。第 2 の文は定型動詞が be であれ

ば、どんな文型でもよい。したがって、これは4)の「混交文」の1種とも考えられる。

なお、there が形式主語や名詞のように使われることがある [安藤 p. 53]。たとえば、

- a) There's some apples in the box. 単数名詞として定型動詞の数を決める (informal)。
- b) I don't want there to be any trouble. 準動詞補文の主語となる。
- c) There is nothing wrong, is there? 疑問文の主語となる (is anything? とならない)。
- d) There is believed to be a spy among us. 受動文の主語となる。

2) 人称構文への書き換え : John seems/appears (to be) clever.

この型の構文は、「It seems that John is clever.」を深層構造としてもつ。この構文は非人称構文である。非人称構文を人称構文に書き換える変形が、近代英語の成立期に popular になった。典型的な非人称動詞である happen でも、「It happened that he was out.」から「He happened to be out.」のような人称主語の文がつくられるようになった [安藤 p. 58]。

このような英語史的な構文の転換が一般化したのは、SVC という「あつらえ向き」の文型 (構文 template) があったためではないか。そして、一連の非人称構文が、この SVC 文型になだれ込んだおかげで、この文型の範囲が広がった。と考えると、現在の時点では、歴史的経緯を捨象して、この種の構文を基本文型に繰り込んでかまわないであろう。

3) Tough 変換による派生 : John is easy to please. (=hard/easy 構文)

これも「人称構文への変換」である場合が多い。人・主語でない場合も、「談話の主題・関心の的」を主語に立てるという点で「人称構文」化と類似している。

この変形は SVCA の既存構文 (kind/wrong 構文など) を template として利用したと考えられる。これはまた、{To please} John is easy. と {It} is easy to please {John}. の混交でもある。このように、派生文型の生成には多様な経路や動機が関与している。しかし、結果的には基本文型に準じた簡明な文型に落ち着く。

4) 混交による派生 : This is John speaking./ Mary came home sick.

先の文が This is John. と John is speaking. の混交、後の文が Mary came home. と Mary was sick. の混交であることは容易にわかる。これは複文を単文化する工夫ともいえる。

つぎのような単文化もある。The fact is that nobody knows. → The fact is, nobody knows. この段階では、変形の痕跡 (that の省略) が明白である。しかし混交が進むと、Fact is, it must have been done! のような表現に変わる。Fact が無標化して、Fact is が In fact とほぼ同じになる [大室]。

派生文型はすべて自動詞の構文である。つまり、他動詞文型は派生文型のような variants を生じない。その理由はなにか。この派生文型は、行為や動作を直接記述するのではなく、ある現象の生起や付加的な状況の提示という位相で表現するためにつくられたからではないか。

派生文型は複雑多岐にわたるように見えるが、結果として生じた文要素の組合せ（文型）は十分に簡明であり、基本文型に準じた文型表示が可能である。以下にそれを試みる。

1') There 構文

本来の there 構文である *There is a book on the desk.* は、*A book is there.* [SVA] のような文の倒置型 AVS と考えられる。ところが、there が文頭に立ったために形式主語のようにみなされ（S'と記す）、本来の主語 S は主格補語とみなされる（C'と記す）ようになる。実感的には AVS → S'VC'、つまり、本来 AVS であるものが、SVC（典型的な自動詞文型）と意識されるようになった。この結果を文型の読み替えとして表すと、

[A'VS-A] *There is a book on the desk.* は感覚的には S'VC'A である。

[A'VSz] *There was no one walking in the park.* は感覚的には S'VC'z (z=付加語) である。こう考えてくると、これらがつぎのような「混淆文」と似た語感をもつことがわかる。

[SVCz] *This is John speaking.* これは本来的な SVCz である。

2') 「人称構文」化

これは、歴史的な成立経過（通時相）を無視すると、結果（共時相）としては単純な SVC である。実際、*Seemingly John is clever.* とすると、まさしく本来の SVC になる。これを「基本文型」としての SVC とあえて区別する必要はないといえよう。

3') Hard/easy 構文

主語の立て方が特異であるために、ここではすでに述べた SVCA 2 を S'VCA と表したが、文型要素の並びは、基本文型の SVCA 1 と同じである。同型・異種として考えればよいであろう。

4') 混交による派生

This is John speaking. [SVCz] が there 構文と通底するものであることはすでに記した。

Mary came home sick. は 2 文の混交・単文化であるとともに、*came home* を動詞句（帰宅して家にいる「状態」を表す）と考えると、S-PV-C（基本文型のⅢ）とも解釈できる。

このように多様な「派生文型」がさまざまな経路で形成されてきたが、結果的・語感的には S'VC'、S'VC'A、S'VC'z のいずれかに帰着させうる。これらは、典型的な自動詞文型 SVC の variation である。だからこそ安定的な構文として定着したものといえよう。

以上みたように、派生文型の成因は、文の合成・簡約、複文の単文化、非人称構文の「人称構文」化などの多様である。このような成立過程（通時形態）の多様性にも関わらず、結果として生じた構文（共時形態）は S'VC'、S'VC'A、S'VC'z に準じた構造をとる。つまり、popular な自動詞文型である SVC や SVCA が規範的 template として機能し、これに準じて、歴史的由来を異にする派生文型が、語感的には似通った構文を取るに至ったものとみることができる。

派生文型を基本文型と関係づけて示すと下表のようになる。

8 SPs	基本文型	派生文型	文例	等価文型	成因
II	SVA	A'VSA	There is a book on the desk.	=疑似SVCA	倒置
III	SVC	SV'C	John seems/appears clever.		「人称構文」化
IV	SVCA	S'VCA	Sanskrit is hard to learn.	=SVCA 2	tough 変換
混交文 1		A'VSz	There was no one waiting.	=疑似SVCz	存在/生起構文
混淆文 2		SVCz	This is John speaking.		存在/生起構文
混淆文 3		SVAz	Mary came home sick.	=疑似S・PV・C	状況付加

ここで z は付加語 adjunct を意味する (z は非本来的文型要素なので、これだけ小文字で示す)。

There is a book on the desk. は本来 AVS、A'VSA という倒置型に発すると考えられるが、文頭に立つ there があたかも形式主語のように機能するようになる。そう考えると、もとの主語は補語となり、A'VSA が疑似SVCA に変わる。

§4 結論 — 文型の統合的理解

以上の考察で得た文型システムは、十分に網羅的であり、「派生文型」もカバーする。しかし、文型の数が増え、もはや「簡明」とはいいがたい。網羅性を失うことなく、簡明性を確保するにはどうすればよいか。文型システム簡明化のためには、多数の文型を統合的に理解する必要がある。それには、自動詞文型が [SVXY]、他動詞文型が [SVOX] の形で表しておくといよい。

すなわち、英語構文はつぎのように整理できる。

(1) 自動詞文型 SVXY : X=∅ (Null), A, or C ; Y=A or z

まず X がない場合 (Null) SV, 3 要素なら SVA or SVC。第 4 要素 Y があるときは SVCA か SVCz と定まる。要素数は自明とすると、1 回の「2 者択 1」(1 bit に相当) で文型分析ができる。

(2) 他動詞文型 SVOX : X=∅ (Null), O, A, or C

このとき X がない場合 (Null) SVO、ある場合 SVOA、SVOO、SVOC のどれかである。必要な識別は最大で 3 者択 1 である。これは、1.6 ビット (log₂ 3) の情報処理を意味する。

文型リストの形で示すとつぎの表になる (* は派生文型を示す)。

SV XY	自動詞文型	SV OX	他動詞文型
SV	Money talks.	SV O	Bees gather honey.
SV A	She is out.	SV OA	Jane put her bag on the stool.
SV C	Diamond is hard.	SV OO	Mary showed John a map.
SV CA	She is afraid of dogs.	SV OC	I saw a dog cross the road.
S'V CA	Sanskrit is hard to learn. *		
SV Cz	This is John speaking. *		
S'V C'z	There was no one waiting. *		

文型数 11 は多すぎるように見えるが、各項の「共通性・差異性」に着目すると、識別は容易である。とくに派生文型がすべて SVCX (X=∅, A, z) の文型に帰着することは興味深い。これは一種の「引き込み」(canalization) 現象と考えられる。

実際には、構文分析をつぎの要領で行う。これは情報論的な interpretation である。

◇ 第 1 step 「自動詞 Vi・他動詞 Vt」を判別する (2 者択 1, 1 ビット処理)。

V のつぎの要素が目的であれば Vt (文型リスト右)、それ以外なら Vi (文型リスト左) である。

◇ 第 2 step 自動詞の XY or 他動詞の OX の文型要素を識別する (1~1.6 ビット処理)。

自動詞文型の場合、2 要素なら SV (自明)、3 要素 SVX なら X=A or C の判別、4 要素なら SVCY となるから、Y=A or z の判別をする。要素数は自明とすると、2 者択 1 (1 ビット処理) で文型が決まる。これで文型リストの左側の仕分けができる。

他動詞文型の場合、3 要素なら SVO (自明)、4 要素 SVOX なら X=A, O or C の判別をする。これは 3 者択 1 (1.6 ビット) である。これで文型リストの右側の仕分けができる。

◇ いきなり「8 文型から 1 個を選ぶ」処理は、8 者択 1 (3 ビットの情報処理) であり、瞬時には行えない。これに対して、2 者択 1 (1 ビット処理)、3 者択 1 (1.6 ビット処理) は瞬時に行いうる。動詞の自他をまず判別し、つぎに文型要素 XY または OX の要素を識別するほうがやさしい。

要素数の判別を自明とすると、第 2 step の情報処理は最大で 3 者択 1 (1.6 ビット処理) である。2 step 合わせても、合計 2.6 ビット以下である。情報理論的には、この 2 段階処理が断然有利である。

文型公式は、SVXY と SVOX の 2 通りである。あとは、現実のセンテンスを文型要素に分節し (sense group の識別)、その品詞的機能を説明すればよい。しかし、文を sense group に分かち能力自体が文型の習熟にかかっている。英語学習において、idiom や collocation の習得が強調されるが、そのまえに「文を sense group に分節し、それを文型に即して再構成すること」が英語 (外国語一般) 理解の基本である。読解力の足りない学生をみると、この基本が身につけていないことがわかる。いくらまじめに辞書を引いてもまともな解釈ができない理由はここにある。

会話の場合には、通常 sense group の切れ目に「間」が入り、発話者が sense group を explicit に表現する。だから、聞き手は「分節」の労を省いて、直接に構文理解 (文型分析) に入れる。この点では、「読解」より原理的に負担が少なく、文型分析の効用が高い。ただしその前提として、話し手の発する音声で「語として聞き取る能力」が必要で、通例ここに困難がある。

真に効果的な文型システムは、現実の英語構文を十分に網羅し、かつ簡明でなければならない。これは互いに矛盾する要件である。網羅性 (coverage, completeness) を確保するためには、文型数を増やす必要がある。他方、簡明性のためには文型数は少ないほうがよい。文型の数が多くなると、文型判別に手間 (時間) がかかる。これでは文型システムとしての効用が損なわれる。なぜなら、文型システムの意義は、文構造の template (overlay) として機能し、文の表現・理解を助けるどころにある。それには、発話/受話と同時的 (simultaneous) に機能することが望ましい。

本稿の考察により、統合的な自動詞文型 [SVXY]・他動詞文型 [SVOX] の一般型を用いて、「8 文型論+派生文型論」の網羅性を踏まえ、かつ十分に簡明な構文解析を行うことができる。その際、

派生文型も「通時的変化」を捨象して、基本文型と同じように扱う。本稿は、生成変形文法的分析と背反しないように注意しつつも、そのような専門的考察をなるべく skip し、可能なかぎり簡明な形で文型概念を説こうとしたものである。

補 論

§5 準動詞補文の意味上の主語(S')

SVCA 1 と SVCA 2 の相違点は、準動詞の句（補文）の主語がなんであるか、それが主文中の語句とどう関係するかにある。

不定詞や分詞などの準動詞 (verbal) は、意味上の主語 S' と結合して意味上の文（補文）をつくる。これが主文のなかにどのように組み込まれるかは、変形文法上重要なテーマとなってきた。つぎのように場合分けできるであろう。

1) 主文の文型要素が準動詞補文の主語 S' となる場合

1a) 主文の主語 SVCA 1 He was careless to take a wrong train.

1b) 主文の補語 SVC She was the first to arrive at the goal.

1c) 主文の目的語 SVOC I saw a dog cross the road.

I smelled something cooking. (be が省略されたとみてもよい)

2) 主文の文型要素でない語が補文の主語となる場合

2a) 所有格名詞（代名詞）があとに続く準動詞の意味上の主語になる。

his desire to see her ← He desires to see her.

her ability to speak French fluently ← She is able to speak French fluently.

his failure to arrive there in time ← He failed to arrive there in time.

この用法は、所有格が「主格を表示する機能」をもちうることに由来する。この to 不定詞は形容詞用法で、先行する名詞を修飾する。desire と to see, ability と to speak は、同格的な位相にあるから、結局 his desire や his seeing を含意する。所有格に修飾される名詞は、主文の主語、目的語、補語なんでもかまわない。

2b) 文中に存在しない語が不定詞の意味上の主語となる場合：

Sanskrit is hard to learn. SVCA2

この場合、不定詞の意味上の主語 S' は implicit であり、文意から推定するしかない。これは 1a) の SVCA 1 と異なっている。(準動詞の意味上の主語が不確定であることから生じる問題は次節で扱う。)

ただし、主語を明示する場合もある。このとき、文意上つぎの 2 通りが可能である [安藤]。

Sanskrit is hard/easy...for him to learn. → For him to learn Sanskrit is hard/easy.
Sanskrit is hard/easy for him...to learn. → To learn Sanskrit is hard/easy for him.
(語調の「間」を…で示した)。

§6 準動詞の態と SVCA 文型

つぎのような書き換えについて考えよう。

Sanskrit is hard to learn. → Sanskrit is a hard language to learn.

This nut is hard to crack. → This is a hard nut to crack. [Hornby 188ff.]。

右側の文を単なる SVC と解してよいか。たとえば、第1の文で to learn は、形式上 a hard language を修飾する不定詞(形容詞用法)であるのに、実質は hard を修飾する副詞用法である。形式(語順)と内容(修飾関係)がずれている。

面白いことに、訳文には原文のようなねじれがない。右側の文は「割りにくいクルミ」、「学び難い言語」を表す。和訳の文では、語順と係り受けが一致している。なぜこうなるか。それは原義が a (hard to crack) nut や a (hard to learn) language を意味するからである。日本語にすると語順が自動的に調整されるために自然な表現になる。

これだけ見ると、形容詞とそれに続く副詞句が語順の制約上分離しただけのようである。しかし、これには準動詞の態表現における可塑性 flexibility ないし曖昧性 ambiguity という問題が関わっている。

Jim is eager to please (every one). SVCA 1

Jim is easy to please. (→ to be pleased) SVCA 2

後者の文に対して、生成文法では [someone/ please/ Jim] という深層を想定し、そこから出直すので、ここで論じるような曖昧性は生じない。しかしここでは、なるべく「深層に降りる」労を省き、表層の表現を可能なかぎり文型論のレベルで分析することを試みる。

慣用の準動詞につぎのようなものがある。能動態のまま受動態の意味をもつ。

There is a house to let near the park. (SVC)

JR West Japan is greatly to blame for the accident. (SVC)

The car needs repairing. (→ to be repaired) (SVO)

The manuscript may require correcting. (→ to be corrected) (SVO)

慣用の表現でない場合に、「論理的に正しい」と考えられる受動態に変えたらどうなるか。

Sanskrit is a hard language to be learned. ← to learn

こうするとたしかに、不定詞が通常の形容詞用法となって先行詞(language)と自然につながる。しかし、形容詞 hard と learn のつながりが切れてしまう。これでは、文意がボケる。

つぎのような SVCA では、C と A の意味的照応が重要となる [Hornby 190f.]。

Our team is impossible to defeat. SVCA 2

この文は「不敗・無敵」の意味で適格である。

ところが、impossible を possible に変えたら非適格文になる。

これと対照的に、つぎの例はすべて適格である。不定詞の態表現に歪みがないからである。

It is (im)possible to defeat our team. (SVC) ともに適格文。

Our team is (im)possible to be defeated. (SVCA) ともに適格文。

さて、頭初の例文にもどると、hard を easy に換えてもよい。

Sanskrit is easy to learn. 適格文

Sanskrit is an easy language to learn. 適格文 (内容の「真偽」は別)。

ただし、「態」以外に、不定詞と形容詞の意味上の整合性も効いている。たとえば、

It was careless of you to take a wrong train. で careful を使うわけにはいかない。

なお、不定詞や動名詞において能動型が受動態の意味をもちうることは、これら準動詞 verbal が非人称的に (人称不定のまま) 行為を表現することにもとづく。

How to do it と What to do を比べて見よう。前者が単に How we should do it を表すのに、後者は What to be done または What we are to do のことである。つまり、What は do の目的になっている。

態表現の逆転というより「不定な (明示されない) 行為主体」を (ある範囲で) 勝手に想定しうることの表れである。Impossible to defeat は「(他の) だれもが勝てない」ことから「不敗・無敵」を意味する。この側で意味が固定されると、invincible (vincere=勝つ: Latin) のような表現も可能になる。本来は「勝てない」を意味するのに、転じて「負けない」の意味になった。

§7 他動詞文型 SVOY の諸相: 辞書・文法書にある不備

つぎの例文を対照してみよう。

(a) SVOC: I made him pay for the debt/his loan.

(b) SVOC: I compelled him to pay for the debt/his loan.

(c) SVOA: I persuaded him to pay for the debt/his loan.

(d) SVOO: I promised him to pay for the debt/my loan.

最後の文例だけ、「支払う」主体が「O: 彼」ではなくて「S: 私」である。

文例 (a) は使役動詞の一般的な用例である。文例 (b) は本質的に (a) と同型と考えてよい。

文例 (c)、(d) の文型 assignment (SVOY における Y の識別) は必ずしも易しくない。有名な辞書・文法書の扱いにも不備がある。

1) 文型要素の assignment における誤り

まず、大修館『ジーニアス』では persuade の文型を SVOO としている。例:

He persuaded her to come.

しかし、これは誤りである。文例 (d) をみるとわかるように、to 不定詞が直接目的 dO である場合には、それを主語にして受身型がつけられるはずである：To pay...was promised...など。しかし、To come was persuaded...とは書けない。この to 不定詞は dO ではない (Y≠dO)。

では、A と C のどちらか。この語は persuade him so as to pay ...; persuade him into paying ... と同義であるから、副詞句 A と考える。(『ジーニアス』は率先して 7 文型表示を取り入れた先進的な辞書である。それでもこういう間違いがある。)

なお、この文例 (c) の to 不定詞が A であることは、意味分析上でも重要である。不定詞の副詞用法は主に目的や結果を示す。ところで、この場合は「結果」を示している。つまり、彼は説得を受けて「借金を返した」のである。もし返していないとすると、遡って「persuade」に失敗したことになり、この表現が成り立たない。

これを、「借金を返すようにと彼を説得した」と和訳したとすると、彼が返済を完了したかどうか不確かさが残る。むしろ、「説得して借金を返させた」と訳すべきである。「persuade」にかぎらず、英語の動詞が行為の完結を含意し、対応する日本語の動詞が単に行為の開始・存在を意味するという対比がひろくみられる [池上 p. 86 ff.]。

文例 (a)・(b) でも、(c) と同じく、返済は実行されたのである。つまり、行為の完結性を意味する点で、(a)・(b) の SVOC と (c) の SVOA は同等である。相違点は (a)・(b) の SVOC では、V と C が同時、(c) の SVOA では V と A に時間差があることである。「文型識別」が文意解釈において有効かつ重要であることがわかる。

このように形式上目的 dO の位置に来る to 不定詞句や that 節 (or wh-節) は、so as to とか so that などの意味をもちうる。この場合の SVOY は、SViOdO でなく SVOA と解することが適切である。

2) 同じ文型を異なる動詞構文に分ける誤り

OALD (Oxford Advanced Learner's Dictionary) では文例 (a) と (b) が異なる動詞型に配される。不定詞に to がつくつかないから別枠に入れるからである。しかしここは、<同じ文型だが、特定の動詞群では to を省く>と考えるべきであろう。文型はまずもって論理的なカテゴリーである。文法的論理のレベルと語法的慣用のレベルを同じ次元で扱うのはよくない。

同じような例として、つぎの文例を考える。これらも、SVOO 型の拡張とみなせる。

(e) He shouted to Jane to call the police.

(f) I suggested to Jim that he should get more exercise.

これらにおいて to Jane/Jim が間接目的であることは明白である。ここが her/him なら、to なしであろう。したがって、これらの文は SVOO と考えられる。

ところが、OALD やそれを踏襲する日本の英和辞典類は、この型の動詞にわざわざ<動詞・前置詞句・目的 (句・節)>という動詞パターン (V PP O) を設定する。こうすると、その文型は SVAO となる。つまり、SVAO という新文型が必要になる。これは<無益というより有害な新文型

の設定>である。「to+noun だから、すなわち PP だ」というのではあまりも形式的である。

むしろ、<ひと (iO) に to がついてもつかなくても、この構文は SViOdO だ>と見究めることが文法の役割である。to がつくのは、英語の名詞が格変化を失い、「与格」を語形で明示し得なくなった結果にすぎない。

たとえば、名詞が格変化するドイツ語では、suggest に当たる eingeben を jm. (iO) et. (dO) eingeben の形で用いる。jm. (iO) の部分は名詞でも代名詞でもまったく同じである。なお、

(g) She motioned (gestured) to him to go out.

のように him にもわざわざ to をつけることがある。この to は motion という名詞を VOO の動詞型で使ったことを示す符号と考えてよい。

これらの文例がすべて「SViOdO という共通の型に属する」という認識こそ文法的センスである。OALD のように「to noun は (副詞的) PP である」と規定してしまうと、文法体系としての整合性が崩れる (恣意的に文型「SVAO」を導入することになる)。

これらの to somebody の to を間接目的 iO を示す標識とみなし、それを含む文型をすべて SVOO にまとめるべきである。ここで扱った文例は、SViOdO=S+伝達動詞・間接目的・直接目的という一般的な形式の minor variations である。

3) 異なる文型を同じ構文とみなす誤り

また、OALD では文例 (b) ~ (d) がすべて同じ動詞型: V noun/proun to infinitive になる。これでは、SVOY の Y=C/A/O の識別ができない。28 通りもの詳細な動詞型を立てながら、SVOY の諸相を識別する論理がない。Hornby の動詞型でも、文例 (b)・(c)・(d) は同じ項目に分類される [Hornby 表 62]。

要するに、ここでは OALD や Hornby の動詞型分類は粗すぎる。文型区分のほうがかえって精密なのである。OALD や Hornby の「動詞型」約 30 項目は、一方で不要な区別を立て、他方で必要な区別ができない。紛らわしい構文の判別において、簡明な 8 文型や「派生文型」のほうがより精密・適確である。

参考文献

Hornby, A.S. 『英語の型と語法 第 2 版』伊藤健三訳、オックスフォード大学出版部。

A. S. Hornby: Guide to Patterns and Usage in English, Oxford U.P. (Tokyo).

池上嘉彦『<英文法>を考える』ちくま書房 (1995)。

大室剛志「英語学と英語教育の乖離を埋めるひとつの可能性」、『英語青年』2005 年 7 月号。

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N., and Svartvik, J.: A Comprehensive Grammar of the English Language (1985).

松井千枝『英語学概論——三大文法の流れと特徴——』朝日出版社 (1980)。

副島隆彦『道具としての英語・表現編』JICC 出版局 (1986)